

ことばを見つめさせる国語教育

——「土左日記」の解釈をとおして——

江 端 義 夫

私は、両お説を虚心に拝受する。そして、私の力量でそれらを深く理解した上で、ことばをだいにし、かつ広い視野でことばを見つめさせる国語教育を、将来に向けて開拓してゆきたいと考える。

※ 1 講座『子どもの思考構造』S・42・6 明治図書

※ 2 S・40・7 新光閣書店

二

私は教室で「土左日記」を短期大学の学生と共に、講読演習の形で勉強している。その一つの実践報告を通して、国語愛を持たせ、深くことばを見つめさせうる国語教育の方法の一原理を、私はここに帰納してみたいと思う。

テキストには、三条西実隆本の影印本で、松尾聰編『校註土佐日記』を使用している。授業は短期大学の国文科二年生全員一〇〇人あまりが同時に勉強するという特殊な状況にある。全員が参加できるように方法を考えねばならない。講読にしろ演習にしろ、とかく少数の発表者がリードしていく例が多い。その間、大多数の学生は

野地潤家先生は、「国語教育と思考力」というご論文の中で、「個々の言語主体に、自主的自律的に、思慮深いことばの活動を習得していくよう期待することは、国語科の基本目標であったが、それぞれの言語主体に、その学習者に応じての獨創性を期待することは、国語科の究極目標である。国語愛を持し、ことばをだいにしにする國民こそ獨創性に生きるであらう。」とのべていられる。また、藤原与一先生は、『国語教育の技術と精神』の中で、理と情との一元化教育思想の下に、「論理的思考の国語教育は、いつも生活の地盤の中で、あたたかく進められるのでなくてはならない。このようにしていく教育は、愛情の国語教育である。」そして、「考えさせる」ことばで考えさせる（考えさせて、ことばにさせる国語指導は、きわまるどころ、ことばを見つめさせる国語指導になってよいわけであらう。ことばを見つめさせることのできる人間が、思考力のある人間である。」と述べていられる。

能動的な立場にある自己を自覚しない場合が多い。その弊害を除くために、一人の問題提起者（発表担当者）の研究発表を、基本的に批判することをたてまえに、気付きカードを、全員一枚以上提出させることにした。それらのカードは、問題提起者の発表終了後、五十分間で書かれる。それらのカードは、数人の発問担当者にまわされて、分類整理され、そこでえりぬかれたいくつかの問題についての討論が全学生によってなされる。

三

一時限八十分間でとりおこなわれる「土左日記」の範囲は、一セッションが原則である。この講義演習形式の授業では、第一時限目をAが担当した。

発表担当者Aは、冒頭部「それのとしのしはすのはつかあまりひとひの日のいぬのときにかどです。」を対象に、本文・字母・校異・字体・考証・口語訳・その他の七項目にわたって、諸学者の意見を紹介し、自分の見解を述べた。その時間の発表担当者の準備勉強の多寡、熱意によって、他の学生の質疑応答が高まるか否かが左右される。

まず、「それのとしのし」についてである。発表担当者は、小西甚一氏「土佐日記評解」、築島裕氏「平安時代の漢文訓読語につきての研究」において、両者が土左日記の文体についてふれておられる箇所を引用し、「それのとしのし」は漢文訓読語であることを紹介した。そして、発表担当者は、「それ」は指示語ではないとし、「それ」に「某」の字をあてる馴化の意味を説明し、「それのとしのし」の口語訳を「ある年の」とした。

これに対する質問や意見が、全体の16%もあった。それらは要約

すると次の五つの意見にまとめられる。

○冒頭の指示代名詞「それ」の指すものがはっきりしない。

○「それのとし」と、あえてばかした表現で書き出されているにもかかわらず、十二月二十一日の午後八時頃と、門出の日時を詳述する作者の意図はなにか。

○「それのとし」を作者のフィクション性ゆえとるか、承平四年を正に指示するところかの解釈は、どのように理解すべきか。
○「それのとし」を、口語訳で、なぜ「ある年」とばかしたいのか。

○ばかすということと、貫之の表現意識との関係はどうか。

これらは、質問者自身の主張をもちこんだ彫りの深い意見にはなりえていない。概して直覺的な発言が多い。「それのとし」が漢文訓読語であるからといって、すぐに作者のフィクション性や表現意識をとりざたするのは、軽率すぎる発言である。もっとも、それは根底において常に心がけていなくてはならないことではある。また、「土左日記」全体を通して用例をひろい、作者の創作の意識を問うような質問、意見が出てこなくてはならなかった。そこで、「語」を語として、その場でのみ問題とせず、他との関係の中で見つめていくことを指摘し、指導する必要がある。それにしても、何気ない「それのとし」ということばに、意外にも深い意味と背景があることに驚いた諸学生が、未分化な思いを、「問う」という形で表明したものだとして理解してあたたく認めることは大切なことだろう。

さて、文頭の「それのとしのし」と関連させて考察していかなくてはならないのは、文末の「いぬのときにかどです」である。発表担当者は以下の資料をあげて、主として平安時代人の旅立ちの習俗に

ついで知ろうと努力したようである。

○要するに昔の市民時刻では、季節により一刻が変動したこと、従って、何の刻が今の何時と簡単にきめられず、その季節の日の出、日の入りと関係づけなくてはならぬことの二点に注意すべきである。さてここは旧曆十二月末のことであるから、だいたい今の七時すこし過ぎから九時ごろまでのことであろう。当時は、人目をさける目的で、夜間の旅立ちや帰宅が外い。(小西甚一氏『土佐日記評解』)

○午後八時に旅行の出発をするのは、不審のようであるが、この種の門出は平安時代によくあった形式的なもので、旅行を、大吉の日を以ては始める形式をとのえる為に大津まで行くのだから、夕方でもよかつたのである。(中田祝夫氏『土佐日記』)
○ただ当時は、旅立ちなどがこのように夜に入って行われたものだという常識を持って居りさえすればよい。(萩谷朴氏『土佐日記新釈』)

○日あしければ門出ばかり法性寺のへにして暁より出でたちて、午時ばかりに宇治の院にいたりつく。(『蜻蛉日記』)
○十三になる年のぼらむとて九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。年ごろあそびなれつるところを、あらはにこぼち散らして、たちさはぎて、日の入りぎはの、いとすぐきりわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、(後略)(『更級日記』)

その結果、発表担当者Aは、「土佐日記の場合のかどでがなぜ成の刻でなくてはならなかったのかはわかりませんでした。」と述べた。この発表に対して、他学生は、全体の気付きカードの内の20%

もの質問・意見をよせた。

○当時の人が人目をさけて夜間の旅立ちをしたのはわかるが、「いぬのときに」と克明に記したのはなぜか。

○「いぬのときに」を口語訳で「午後八時頃」とぼかしたのはなぜか。

○昔の市民時刻というのはどういふものか。

○「かどです」というのを「旅に出ます」と発表担当者にとっているが、この場合の「かどです」は、「縁起の良い日」を選んで、旅に出る方向にいったん家を離れた。」という意味を含んではないだろうか。

○「いぬのときにかどです」についての解釈は諸説があって、決定的な説はないようだ。しかし、どの説も旅立ちの時刻として夜を認めるのはなぜか。人目をさける必要がどうしてあるのか。

○「当時は人目をさける目的で夜間の旅立ちや帰宅が多い。」「旅立ちなどが夜に入って行われたものだ」という意識をもって居りさえすればよい。」とか注釈にある。旅立ちというのは、余程の事情がない限り、日中が好都合と思われるのに、当時の風習が理解できない。

これらは何を意味するか。即ち、今日の旅立ちの自由さに比較すると、当時の門出のならわしがどのようであったかに、深い感心をもつ学生が多いということである。そこで、私は以上をうけて次のような意見をのべた。

○なげ年は「そのとし」とぼかしながら、日時まではっきりと書いたか。

承平四年の出立とわかっていても、作者はそれを明示せずにおいて、「いぬのときにかどです」というところで、「いぬのとき」の「に」ではっきり時間を指定している。

冒頭であるから、作者は心をこめて書くはずである。ものを書くとき、冒頭ほどむつかしいものはないし、冒頭で大体その作品の価値が決まるといってもいいだろう。だから、貫之ほどの人がいたづらに書いたはずがない。

小西甚一氏が『土佐日記評釈』で述べておられるように、やはり、安全な日中の旅立ちをせずに、わざわざしむすのいぬの刻という暗い夜に、旅立ちを選んだのは、やましきことか、人目をさけるべき理由などがあったからかもしれない。不満をもちつつ、いぬの刻に、ともかく出立したのだと、はじめをつける意図があったのであろう。

しだいに意味が強められ高められていく貫之の文の表現の特徴をとらえて、このような考えを述べた。いまや、内面心情のうねりが累加され、頂点に達するところの「かどです」を、だいにみつめてみなくてはならない段階にきた。そこで、私は次のように考えて、学生に意見を聞いてみた。

○「かどです」は「門出す」か。

「門出」は一点を離れることを言うようであるが、「首途」は一点から離れることが問題でなく、「旅の空に向いて」という内面的で線条的な方向を意味すると考えられる。漢文の素養にたけた貫之は、「字類抄」にあがっているような「首途」の字を頭に浮かべて、「カドデス」と表現したと考えていい。

四

二時限目は発表担当者Bが、Aと同じ要領で、「そのよしいささかにもにかきつく。」という一文について研究発表を行なった。

最も深く貫之の心に触れることばの解釈をするために、全員が努力したのである。まず、発表担当者Bは、自分の能力の限りをつくして研究資料をさがし、深く考察して、必ず自分の意見を言うように、一週間前に指示されていた。

「そのよし」についての発表担当者の発表プリントは次のようであった。

○そのよし代名詞「そのよし」

代名詞「そ」は何を意味するか。——口語訳として——

(1) 上文の「門出」を受けている。

山岸徳平氏『評釈平安日記文学』

今井卓爾氏『土佐日記の解釈と文法』

(2) 土佐から京までの帰路の旅行 (中田祝夫氏『土佐日記』)

の旅中 (萩谷朴氏)

(3) 「そ」：指示代名詞 (中島悦次氏・野中春水氏)

このBの発表に対して、他の学生は、質問というよりは、自分の見解をカードに書いて提出したものが多かった。

○「そ」は代名詞であり、(1)のように「門出」を受けているのはもっともだとも思うが、冒頭で「をとこもすなる……女もしてみむ……」と日記を書きつづけることを示しているので、この場合は、「門出を含む旅中の様子全部」をさしていると思う。

○ある人の身近な女性が筆をとったように設定されているので、「そ」は直接には「門出」をさすが、「ある人の門出から京まで

の旅中の次第」を、作者がぼかして表現したと見られないだろうか。

○ここは序文であるので、「そ」は「門出」を指さず、「土左から京までの旅の様子」を指しているのではないか。

これらは「そ」に注目しつつも、「…のよし」にひきよせられすぎた解釈・意見になっている。これに対する反論が当然見られた。

○「そのよし」の「そ」は近称なので、「土左から京までの旅行」と見るのはおかしい。なぜなら、前文に「門出」とは書かれていないからである。あまりにも前文とかけはなれていると
思う。

また、「そのよし」の「の」の用法について、「そのよし」にふれたものに、

○「そのよし」の「よし」について。名詞として単に「事情・次第」と訳すだけではものたりない感じがする。訳としては、これ以上のことばは無理かもしれないが。

がある。これらは、いかにも表面的な意見でもある。私どもは、「そのよし」の内部心盾（生命）にふれて考えてみなくてはならない。微妙な包括性をもつものが、形式名詞のたぐいではなからうか。それが見逃されているからである。

そこで、私は「そのよし」の内部生命を、次のように考察してみた。「もの」と「こと」との止揚統一されたものが「よし」である。

「もの」は静態であり、目でとらえられる具体物であるが、物としてとらえられた時、それは抽象的な実体として認識されるであらう。すなわち、「もの」は形象とも言い換えられる。それに対し、「こと」には動きがある。ただに現象のみでなく、現象的様態として把握

される。様態は目に見える。そして、やはり外在するものである。しかし、「よし」は、それらをこえて、それらの要素を包みこんだ現象である。「よし」はふくよかなものとしてとらえられよう。いや、とらえられるのではない。共に動いていることそのことと考えられる。この考えに立つと、「そ」は門出をさす、「そのよし」となった時、これは門出でなく、「ある方向をもった事情」である。門出という事態だけでなく、その旅立ちへの動きを含んだ生き方（流れ）を内包する。即ち、これは弁証法的に合一されたものと見ることでできよう。このように考え深めるとき、先に、「かどです」を「内面的で線条的な方向を意味する」と理解したことが生きてくるのである。「よし」が流動していく内面現象としてとらえられるからである。

六

さて、土左日記演習でとりあげた諸問題を見通すと、日本語の性格についての次の二つの事実ないし理法の重大さが再認識される。

その一は、藤原与一先生が、『日本語文法の世界』で述べておられる、日本語表現法の文末決定性¹ということである。「日本語表現法では、表現内容が、文の初めの方では決定されず、文叙述の進行につれてしだいに決定されていく。したがって、語は、その決定の方向をたどる順序に採用され、最後に表現決定素がくる。」（『日本語文法の世界』S・44・7 塙書房63ページ）

この理法を土左日記の解釈に考えあわせると、「その年の十二月の二十あまり一日の日の戌の刻に首途す。」（著者翻字本文）の文の意味の重さの頂点は、「首途す」にある。その次に重いのが「戌の刻に」である。その次が十二月の二十あまり一日の日の」で

ある。そして、もっとも軽い意味で、発語的とでもとれる感じで「その年の」がとらえられるということになるだろう。従って、口語訳は、「ある年の」というように、さらりと言いはじめ、「首途す」に力点をおくようにするのがよい。

「そのよしいささかにもに書きつく」の場合も、「書きつく」という厳肅な意志的なころみの表現の前には、前接の「もの」は紙であることがわかつているのであるから、しいて「紙」と口語訳しなくても「もの」でよい。そして、何を書きつけるのかと言え「そのよし」なのである。「そのよし」は、「その」が「よし」にかしこめられており、前述のような深みと高さのあることばである。それを「いささかに」ということばで、緊張をほぐそうとしているのである。そして、「書きつく」でその気持ちをやうけとめていく。かくて、意味が文末に収約され、たたみこまれていく。

このような文末決定性を、私どもは日常の方言生活でよく経験する。たとえば、

○アンマリ ヨーフッタデスケー ナー。ミイリガ ワリーデス
ワイヤ。

(あまり雨がよく降ったですからね。
稲の実入りが悪いですよ。)

(中男↓中男) (備後)

稲の実入りの悪さが述定され、そして、ワイヤ文末詞によって、主体者が強く表面に出てくる。婉曲さを品のよさと見れば、右の例は、自然、品格の低い文章ということになる。ワイヤが表現性決定素である。(この場合、表現決定素をより細かく見て、ワイヤは表

現性決定素と見られる。)

○イロイロ マー イーカタガ アリマサー ナー。

(いろいろまあ、言いかたがあります
よねえ。)

(老女↓中男) (備後)

こののんびりした文表現の表情を仕立てているのは、後あがりの文アクセントである。そして、のんびり文アクセントの頂点は、「アリマサー」の「マ」の高音にある。伝達したい実質の内容は、文末詞直前で終わる。文末詞「ナー」は親愛の表現性をもたない役割としての表現性決定素であろう。いわば全体をととのえるという役割が大いである。もう一つの実例をあげる。

○ウチニヤー オリヤー シマシエン。

(家にはいません。)

(中女↓少女) (備後)

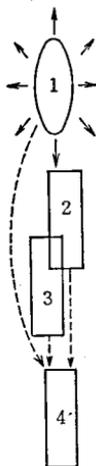
「オリヤー シマシエン」において、格助詞「は」によってとりたてて、そして「シマシエン」と打消すという断定的な表現は、相手につよく訴えかけられる。もはや文末詞も必要としないのである。打消の助動詞「ン」によって、強くうち出され、「シエ」という特色音節がさらに相手の耳をうつのである。

以上を統括すると、すべて話すことばも書きことばも、ことばを見つめる主眼点は文の末部であることが確認された。教育の現場にあっては、この原理を前面におし出して教育すべきである。そして、意味の決定は、文初で行なわれず、あとへあとと重ねかけられていき、文の末部は最も重い意味になるという日本語の修飾―被修飾の原理の応用が、解釈上、とくに重要であると思う。

次に、古典解釈上重要なもう一つの理法について述べる。文の展開を連文空間の展開として見ていくことが、ことばを見つめる上で大事な眼目としてあげられる。

「ことばをみつめる」という作業を、もっぱら、分析の極地の世界で実践してきたが、話しことばはもちろんのこと、書きことばにおいても、心の表現は、文を単位とし、連文の形をとって展開されていくものである。完結性をもった文自体にも、意味に軽重の差がある。ゆえに、単位文相互の関係を、連文空間としてとらえることは容易ではないが、この方向での研究と、教育現場への適用が、もつとなされるべきだと考えられる。

土左日記冒頭の四センテンスの相関性を図示すれば、次のようになろう。



1 をともすなる日記といふものを、をむなもしてみんとするなり。

2 それのとしのしはすのはつかあまりひとひの日のいぬのときに、かどです。

3 そのよしいささかにものかきつく。

4 あるひと、あがたのよとせいつとせはてて、れいのことどもみなしをへて、げゆなどとりて、すむたちよりいで、ふねにのるべきところへわたる。

第一センテンスめの「をともすなる日記というものを、をむなもしてみんとするなり。」の意味の世界は、四方八方へ、つねに、太陽のごとく光を放ち、いわば輻射熱を放っている。ゆえに、第二センテンスとの連接の関係を「輻射相」とよぶことがゆるされる。第二センテンスとの関係は、「かどです」を「その」で受けとめている関係である。これを「受結相」と呼ぶ。第三センテンスとの関係は、その結びつきよりも、へだたりの方が強い。第四センテンスは、すぐ上の第三センテンスとの結びつきよりも、第二センテンスとの結びつきの方が強いであろう。これを「飛び越え相」と呼ぶ。教師自身は、連関相に一つの体系をもっていて、学生にことばを見つめさせる教育のために、連文相のさまざまな術語を創造させて、楽しみを見いださせていけばよい。これによって、文展開の論理を識得することができるであろう。

拙い一つの実践を通してではあるが、ことばを見つめさせる国語教育の方法の原理を、私は以上二つ帰納した。そして、私は、それがことばを見つめさせる国語教育の方法の前面に打ち出されるべきであることを主張したい。こうして、文末にむけて一語一語を克明に見つめさせ、文表現を文末で収約的にみつめさせ、更に、文表現の脈絡をみつめさせていくとき、私どもは、古典の「土左日記」を素材にしても、現代語を素材にしても、同様に、ことばを見つめさせる国語教育の本筋に立って進んでいけると考えるのである。

(一九七二・十・一三)

教育学会において、研究発表させていただいた拙稿を、論文の形に改めたものである。脱稿後、藤原与一先生のご叱正をたまわって加筆訂正しました。ここに記して感謝申し上げます。

執筆当時、尾道短期大学。
現在、広島大学教育学部福山分校。